

日本歌曲の背景

Background of Japanese songs

浅田 まり子

ASADA, Mariko

1. はじめに

瀧廉太郎の映画「わが愛の譜」を観たことがあるが、彼は23歳の若さで、納得のいくまで音楽をやり遂げられなかった想いを「憾み」というピアノ曲に込めてその4カ月後この世を去った。二短調、8分の6拍子、短い曲であるが、とても悲哀に満ちた曲である。その他の曲は、誰もが知っている「花」「荒城の月」など、そしてまた幼い時に会った「お正月」「はとぼっぼ」「ゆきやこんこ」など数々の日本の名歌を残してくれた。しかし、その当時の時代背景から見ると、かなり、日本の洋楽事情が厳しかったことが窺える。洋楽発展のため、毎年優秀な人材をドイツなどに留学させ、音楽教員を養成していた。日本からの留学した人々の中には、現代では云うカルチャーショックというべきかあまりに西洋音楽と日本における洋楽とのギャップの大きさを感じた人も多かったと聞いている。現在では海外からの洋楽の技術も情報も豊富になっているが、それだけに音楽大学の卒業生が、教育現場の音楽のギャップに悩まされることもあり、いかに音楽教育をその現場に合わせて教育していくかが課題となる。

映画「わが愛の譜」は想像の部分もあるが、ヒロイン「ユキ」が、幼い時からメーソンにピアノを教えてもらっていたのに対し、瀧廉太郎はその差にも気がつき悩む場面もあった。それだけ音楽は、特にピアノについては、指の動きなどからいっても、幼い時からの教育が必要であることがわかる。まして、ライプツィヒにあるゲヴェントハウスのオーケストラの響きを瀧廉太郎が初めて聴いた時は、どんなに衝撃が大きかったことかと理解できる。瀧廉太郎だけでなく、その他にも留学をした人の中には、そのギャップの大きさに押しつぶされ、異国で自ら命を絶ったということも聞いたり、読んだりしたことがある。また教員のレッスンの厳しさに耐えがたい日々を送り、挫折の果て悲しい姿で日本に戻ってきたという事実もある。日本で優秀だった瀧廉太郎はドイツ・ライプツィヒに留学したことで、さらに目覚め、これからの期待に胸を膨らませたというところで、病気のため無念の帰国をしたことを考えると心が痛む。

このように、瀧廉太郎だけでなく、明治時代から多くの音楽家の必死の努力によって、洋楽が研究され、日本の歌が音楽教育のために作られていったことを、時代や曲の背景を資料から紹介していきたい。そしてそれは現在も幼児や、児童が歌っている簡単な童謡、唱歌ということだけでなく、芸術としての日本歌曲の礎であることを理解してもらえたらと考えている。

日本歌曲を今までに大学の授業や、合唱団の中でも日本語の発音や音楽的表現法など研究しながら伝えてきたが、日本の洋楽史を改めて振り返り、再び深く探求したい気持ちが、この執筆の一つの動機である。またもう一つは教員養成の音楽科目に携わるようになってから、この洋楽の歴史人物の氏名やその功績、曲について知らない学生が多かったので、紹介することで少しでも興味を持ち、次の世代にも伝えてくれることを願いつつ執筆することにした。

2. 洋楽の歴史

わが国の洋学伝来は天文18年（1549年）鹿児島に渡来したサヴィエルのキリスト教活動に伴って、はじめて齎されたと言われている。永禄4年（1561年）豊後府内の教会付属学校では教理教育の中で、ラテン語で聖母参加などが歌われていた。そして、天正8年（1580年）日本人聖職者養成のために、セミナリヨ（小神学校）を有馬、安土に、コレジヨ（大学）を豊後府内に創設した¹⁾。

天正欧州派遣少年使節の少年たちは、当時の宣教師たちによって、コレジヨでオルガン、ソルフェージュ、唱歌を習得していた。ことにその中で、伊東マンショは特に音楽の技能にすぐれ、信長公の前でも渡欧前にオルガンを安土で演奏し、感銘を受けた信長は、再度アンコールを伊東少年に求めたという。その後、念願の「ローマ法王」の前でオルガン演奏をした少年使節は、帰国後、キリスト教が禁教となっていて悲惨な生涯が待ち受けていた²⁾。

キリスト禁制のもとに彼らを襲う迫害は約50年に亘って築いた洋楽の芽は滅びてしまった。長い鎖国の末、最初に日本人が接した軍楽は嘉永6年（1853年）、ペリーの浦賀入港の際に引き連れてきた二組の少年が奏する軍楽だった。明治2年（1869年）10月英国歩兵隊の軍楽隊長フェントンが伝習した薩摩藩士30余名が演奏したのが最初であった。その後、明治4年（1871年）明治政府は兵部省を新設して軍楽隊をおくことになり、各藩からラップ手やオランダ式鼓笛隊を招集して伝習をはじめた。指導者は英国軍を退役したフェントンであった³⁾。

明治6年（1873年）切支丹禁制の高札が撤去されたが、キリスト教の賛美歌はそれよりもかなり早くから普及していて、宣教師ゴープルによって日本語に訳されて歌われている。この伝道法としては、洋楽に違和感を持つ民衆の感情を考えて、教会堂の造りを寄席風にし、賛美歌を小唄や都々逸で歌わせ、オルガンの代わりに三味線や琴を伴奏に使ったこともある

という⁴⁾。

この時代でのこの宣教師による洋楽の伝道方法から読み取れることは、伝統的なことを堅く守る日本の状況から伝道するという事は相当な苦勞があったということが窺える半面、宣教師の人柄がとて受容性の高い宣教師であったと評価できるし、さらに日本の独自の歌を作ることがこの日本で伝道できる条件であったことが根深かったと考えられる。

一方、明治3年(1870年)太政官の中に雅楽曲がおかれ、同4年(1871年)雅楽課と改称、同21年(1886年)雅楽部、同40年(1907年)に楽部となった。このように宮内省に属することになった伶人(以前は楽人)たちは、明治7年(1874年)から洋楽を習い、明治12年(1879年)には早くも有志によって「洋楽協会」(のちに音楽協会)が設立され、雅楽に交えて、洋楽がしばしば演奏された⁵⁾。

軍楽隊は明治38年(1905年)より日比谷公園に進出して定期的に公演音楽を奏して市民に愛された。その一方、教会音楽は信徒の増大につれその歌を普及していった。しかし、明治期の人々は邦楽の郷愁を捨てることはできず、身につけていたのは邦楽の音感であった。新興ブルジョワジーの成長と共に漸次洋楽を支える層が広まっていく。それは実用音楽をこえた芸術としての洋楽を楽しむ階級であった。明治期の洋楽を考える時、音楽教育が中心となることということは、洋楽がこのような背景の下に生まれ育っていったからである⁶⁾。

3. 唱歌誕生

洋楽の歴史によって明治の初め、日本人の洋楽の受け入れはとても困難だったことが窺われた。現代とは違って洋楽に関する情報が庶民のものではなかったことが、その進歩を大幅に遅らせたことがわかる。その陰で、唱歌教育から始め、日本独自の唱歌を作り、音楽の教科書の礎を築いた伊澤修二、岡野貞一、瀧廉太郎、井上武士の音楽家4名を紹介し、その唱歌誕生の歴史を追っていくことにする。

①伊澤修二 嘉永4年(1851年)~大正6年(1917年)

信濃国高遠城下出身であり、下級武士の家に生まれたが、非常に向学心に燃え、藩校進徳館では抜群の秀才であった。高遠藩貢進生として大学南校に学び、英学、蘭学を修めた伊澤は明治5年(1872年)文部省(現在は文部科学省)に出仕、明治8年(1875年)に愛知師範学校校長在任中に「師範学科取調べのため」という官命により、米国ボストン郊外のブリッジウォートル師範学校に留学し、小学校における唱歌教育の必要を自ら体験することになる。しかし伊澤の留学より3年前の明治5年政府は近代国家を目ざし、新しい教育制度を敷き小学校普通教科目に「唱歌」が、中学校に「奏楽」が取り入れられた。しかし、この教科を実施する力がなく「当分之ヲ欠ク」という但し書きが添えられた。なぜなら、先生も教材も方法もなかったからである⁷⁾。

伊澤は初等教育者として権威のW. メーソン (1818~1896) に入門し、懇切な指導のもとに音楽を学んだ。この体験が日本の唱歌教育法確立のために大きな発火点となった⁸⁾。

明治10年(1877年)ブリッジウォーター師範学校卒業、そしてハーバード大学に入学して理化学を修め、地質研究のため各州を旅行。明治11年(1878年)帰国した⁹⁾。

明治12年(1879年)文部省学務課の久保田譲は伊沢の取調書に基づいて「音楽伝習所設置案」を提出したが財政理由によって取り調べることから着手することになり、音楽取調掛が創設され取調御用掛兼務を命ぜられる。そして恩師メーソンを迎えて取調事業を開始した。伝習生は12歳から44歳の主婦まで特例の男女共学で、教材作りと並行して奏楽や理論など緻密な授業が行われた。しかし、教材が間に合わない状態で、「唱歌」という言葉さえはっきり確定していなかったため、一曲の楽譜ができあがるのには相当な時間がかかり、楽典の翻訳も帰朝後の神津専三郎に委嘱して最初の楽典が刊行される。

今度は集めた曲に国語の歌詞をつけることに取りかかったが、作歌者を広く求め、稲垣千穎、加藤巖夫、里美義の3人に委嘱し、数十篇の唱歌ができあがった。この際、楽曲の選択については日本の民情に遠ざかった曲は一つもとらない方針であり、メーソンから原曲が提出され、協議論評後、取捨した。日本の雅楽、俗楽がスコットランド・古代イギリス曲の類似性がメーソンから指摘され、スコットランドの曲を採用したものも多かった。数十回の歌詞の改作を経て成った「螢の光」「思ひ出づれば」などはその一例である。また明治14年(1881年)伊澤は『唱歌略説』を編纂出版しているが曲目は次のようである。唱歌略説第一には「君が代」「若紫」「五倫」「五常」「思ヒ出ヅレバ」「螢の光」、唱歌略説第二「蝶々」「見渡せば」「春の弥生」である¹⁰⁾。

その後、伊澤は明治19年(1886年)文部省編輯局長となり、明治21年(1888年)東京音楽学校校長、明治23年(1890年)に国家教育社を創立した¹¹⁾。

明治28年(1895年)の日清戦争後には台湾総督府随員(民政局学務部長心得)に就任した。明治30年(1897年)貴族院議員に任ぜられ、「幸クラブ」に所属する。この年、帝国教育会名誉会員に推される。明治36年(1903年)楽石社を創立し、明治38年(1905年)吃音矯正実施、旭日小綬章を授けられる。大正6年(1917年)5月3日脳出血で(67歳)死去¹²⁾。

②岡野貞一 明治11年(1878年)~昭和16年(1941年)

現在の鳥取市古市出身。明治25年(1892年)キリスト教徒として鳥取教会(現在、日本基督教団)で洗礼を受け、翌年、岡山の教会で宣教師からオルガンの演奏法を習った。明治25年(1892年)に東京音楽学校の第二代校長である村岡範為馳が本人の郷里でもある鳥取で行った講演に影響され、同校に入学、後、東京音楽学校教授となり、昭和7年(1932年)に退官するまで音楽教育の指導者の育成に尽力した。文部省編纂の尋常小学唱歌の作曲委員であった。約40年にわたり、東京の本郷中央教会(明治・大正期には本郷中央会堂とよばれた、カナダメソジスト系の教会)の教会オルガニスト(聖歌隊も指導)であった。

岡野は高野辰之《明治9年（1876年）～昭和22年（1947年）長野県出身、国文学者、作詞家、明治43年（1910年）東京音楽学校教授¹³⁾。》とのコンビで多くの小学校唱歌は「故郷」「春が来た」「春の小川」「朧月夜」「紅葉」「日の丸の旗」があるが、著作権の問題などで作曲の事実が研究されたが、実際に作曲の証拠があるとの説も、調査の結果確証に至っていないという。しかし、学校共通教材としては、岡野貞一作曲として書かれているが、その確証の研究はこれからされる段階であるという。だが、岡野貞一は樺太、台湾、朝鮮、満州まで、160校を超える校歌を作曲した¹⁴⁾。

また、現在でも小学校歌唱共通教材として岡野、高野コンビの唱歌が多く導入されている。それだけに日本の作曲家であり、日本の音楽教育に尽力した教員である。

小学校学指導要領解説音楽編4章の1(5)には「音楽の共通教材は、我が国の伝統や文化、自然や四季の美しさや、夢や希望を持って生きることの大切さなどを含んでおり、道徳的の心情の育成に資するものである」と記されている¹⁵⁾。

このような理由で、岡野、高野コンビの多くの優れた唱歌が、いつまでも伝承されるように共通教材として取り上げられていることが考えられる。

③瀧廉太郎：明治12年（1879年）～明治36年（1903年）

東京府芝区（現東京都港区）に出身。江戸時代、日出藩上級武士の家柄。父・吉弘と母正子の長男として生まれている。父は中央政府に務めたが、転勤により東京から横浜の伊勢山に移り住んだ。父が外国人と交流があり、家では姉たちが琴の他にヴァイオリンやアコーディオンを習っていたのでその楽器が家にあったため、彼の家庭環境が音楽をするのに適していた。その後、父の転勤で富山、大分に移り住み、小学校も転々としたが、大分県には当時としては珍しくオルガンがあり、それを弾ける教師がいて、オルガンを学ぶことができた。父は政治家にしたいと願っていたが、廉太郎は病弱、強度の近眼だったので、軍人、政界、官界に進むには体力が不足していたので音楽に進むことを許された。瀧は明治27年（1894年）15歳で東京音楽学校に最年少者として入学。明治31年（1898年）本科から研究科に進み、作曲とピアノの才能を伸ばした¹⁶⁾。

明治33年（1900年）文部省が『中学唱歌』を編集するにあたり、公募した折、瀧廉太郎の出した「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」の3曲とも入選となった。これは、歌詞は一流の詩人に委嘱し作曲を公募という形であった。同年8月に組歌『四季』が作曲され、11月に出版された。これは「荒城の月」より早い時期に作曲されたと推定される。当時、独唱、2重唱、4重唱、混声合唱（ピアノとオルガン演奏）の形で組曲を作るなどという斬新な手法がよくぞこの若さで発想できたものだと感嘆せざるを得ない。この時代、廉太郎はピアニストとしての活躍もめざましく、明治31年7月9日、最優秀首席の成績で東京音楽学校を卒業。同年研究科に進んだ。ピアノ・作曲法を学び、明治29年奏楽堂で公式デビューし、ヨゼフ・ラインベルガーの〈バラード〉を弾いた。

当時の批評は「ピアノ独弾。ラインベルゲル氏作バラードは将来多望の公評ある瀧氏の演奏なり全体ピアノ独奏は未だ邦人多数の好尚に適はざるかごとく従って奏者の骨の折る割合に聴者に喜ばれざるが常なれど此演奏は然らずして彼れ小壮可憐の奏者が静に演壇に上がりて弹奏始めてより終わりまで能く聴者の耳を傾けしめたる伎倆実に天晴末頼もしと云ふの外なし氏は声楽に於いても芸術家たる質を具備せる者の如し」(明治30年11月発行『おむがく』第74号より)

明治33年(1900年)6月12日日付けで「ピアノ及作曲研究のため満三ヵ年独逸国留学を命ず」の辞令を受けることとなった。明治34年4月6日横浜港を出帆、5月20日ハンブルグに入港。そしてライプツィヒに到着。10月入学したが、11月25日オペラの帰りに感冒にかかり大学病院から結核の診断を受けた¹⁷⁾。

1843年メンデルスゾーンが創設した旧ライプツィヒ王立音楽院(現メンデルスゾーン音楽演劇大学)に、瀧は文部省外国留学生として入学、ピアノ・対位法を学ぶが、わずか2ヵ月後に肺結核を発病し、帰国を余儀なくされた。その後は父の故郷である大分県で療養していた。瀧は結核に冒されたことから死後多数の作品が遺骸と共に埋めたり、親戚、知友に分けてあげたり、焼却されたりしたという。作品にはピアノ曲もあり、明治33年(1900年)に日本人作曲家初めてのピアノ独奏曲「メヌエット」を作曲。帰国後の明治35年10月30日の「別れの歌」や、遺作であるピアノ曲「憾(うらみ)」は明治35年2月14日に作曲されてから約4ヵ月後、明治36年(1903年)6月29日死去した¹⁸⁾。

滝廉太郎の記念碑がライプツィヒにあるという。瀧廉太郎の記念碑がちょうど100年目の2003年6月29日(命日)に瀧廉太郎の記念碑の除幕式がローデ通り7番地の歩道で行われた。そこは滝廉太郎が明治34年(1901年)6月初め～明治35年(1902年)8月下旬までの間、ローデ通りに住み、ライプツィヒ音楽院で学んだという場所であるという¹⁹⁾。

ライプツィヒは2度ほど訪れたことがあるが、そこには聖トーマス教会があり、カントルにはJ. S. Bachなど有名な音楽家が多い。この教会は1539年、マルティン・ルターが新教布教のために説教を行ったところである。また、この街にはゲーテ(1749年出生)が通ったというレストランもある。そのレストランの入り口の前には、ゲーテの『ファウスト』の中の、ファウスト博士と悪魔メフィストフェレスの像があった。また、ゲーテの銅像がそのレストランの近くにあり、片方の足がレストランに、片方の足が大学に向いているというガイドの話が印象的であった。ゲーテが16歳の時にライプツィヒ大学に通い法学を学び、このレストランの娘に恋をしたということである。その足の一つのつま先は大学(勉学)であり、もう一つはレストラン(恋)を意味しているものであると説明していた。その後、結核を患ってしまったとかで、やむなくフランクフルトに帰ったという話を聞いた。このレストランには『ファウスト』の再現であるといって、大きなビール樽の上に、人と同じくらいの大きさの人形が黒マントと黒い尖った帽子をかぶって乗っていたのがとても面白かった。このレストランでは昼食をとったが、とてもボリュームがあり美味しかったのを記憶している。その

当時、滝廉太郎はこのレストランを訪れたことがあっただろうか。

④井上武士（1894年～1974年）

大正・昭和に活躍した音楽教育者、作曲家、群馬県勢多郡芳賀村（現在の前橋市）出身、医師の家に生まれる。主に唱歌・童謡の作曲に従事し、日本音楽史上に残る数々の作品を遺した。芳賀小学校から群馬県師範学校（現在の群馬大学教育学部）を卒業・一年間上川瀨小訓導を務めた後、東京音楽学校師範科に入学首席で卒業した。小・中・師範学校等で音楽教育に活躍した。台湾総督府附属女学校教諭として台湾に赴任し、帰国後、洗足音楽短期大学に就任・後に東京音楽大学学部長、文部省教科書編集委員、全日本児童音楽家連盟会長、日本教育音楽協会会長・同声会長など歴任した。

作品は「チューリップ」「うみ」「うぐいす」「菊の花」「麦刈り」等の唱歌の他歌曲、芳賀小学校校歌など数百曲。著書には「音楽教育」「日本唱歌全集」「井上武士作曲集」等多数がある。「うみ」は日本の歌シリーズの記念切手にもなった。また多くの校歌作曲にも携わりその数は48校である。死後、昭和50年（1975年）業績をたたえて母校の群馬大学に石碑が建立された²⁰⁾。

当時の彼の小学校には蓄音器がなく、まだ一本指でオルガンを弾く先生が普通で、ドレミをヒフミと習ったという。また音楽学校へ行くといったら、家族全員、親類縁者まで反対された。上野の入学試験は新曲、小学校唱歌に中の一曲を歌うだけであとは学科であった。音楽を教えることについては「子どもに音楽という場合、相手次第で教え方も違うが、やはり子どもたちを知ることが大事。それに合った教育をしないとダメで、いきなり自分の理想論に従ってやってみてもダメだ。音楽教育がうまくいってるかどうかは、地域差もあるがやはり先生によりますね」と語っていたという²¹⁾。

4. 唱歌の背景

唱歌が先人たちによってどのように作曲され、音楽教育をしてきたかを述べてきたが、次に古くから親しまれている日本の歌を10曲取り出しその背景を紹介していく。

①「君が代」

人物叢書伊沢修二によると、楽譜の作者はウェブ、歌詞の作者は稲垣千穎（東京師範学校教員）と書かれている²²⁾。

「君が代」は明治時代初期、歌詞に3つの異なった旋律が付けられた。

第一は日本初のブラスバンドである薩摩藩軍楽隊が立案した曲。明治3年～9年までの6年間、明治天皇の御前で、国歌として演奏されていた。

第二は千年の伝統を守りぬいた宮内省雅楽課が海軍省の依頼で明治13年に作曲したもの

で、今でも国を祝う歌として広く歌われている曲である。

第三は西洋音楽の研究機関である音楽取調掛が明治14年に編纂、翌年発行した「小学唱歌集」初編に掲載されたもので、校内で児童たちによって歌われていた。

第一と第三は現在全く忘れ去られ、「第二の君が代」だけが、以後100年以上に歌い継がれている²³⁾。

「君が代」の歌詞については国連参加国の中で、最も短い歌詞を持つ国家である。ミソヒトモジ(31字)正確には「さざれ石の」が字余りで32文字という少ない字数で未永く続く平和を願っていて、祝祭感はその語感にも良く表れている。一中略一巖のように安定した国土を願う心はそのまま現代の我々に通じているといっても良いだろう。「太平洋プレート」「フィリピンプレート」「北米プレート」「ユーラシアプレート」という4枚のプレートに乗る日本列島には、さらに無数の活断層がひび割れのように走っていて、有史以前から地震災害を繰り返し、我々の祖先も揺れ動く大地の中で、肉親を、仲間を、家を、暮らしを一瞬にして失ってきたに違いない。「巖」という言葉には、国の基準の大岩盤を祈る日本人の深い願いが込められている²⁴⁾。

君が代については、その歴史が古いだけに様々な論議があるが、平成23年3月11日の未曾有の震災を考えると、日本は大震災や水害など、大昔から繰り返し経験をしているのだということに改めて感じた。それ故に日本人の伝統ある古く深いところが受け継がれている歌であるので、この中から日本の自然の姿が伝えられているということも考えられる。

「君が代」作詞は不明(読人しらず)(905年古今和歌集初出)、作曲は林廣守、奥好義、フランツ・エッケルト、採用時期1880年(明治13年)10月26日(非公式)、1888年(明治21年)(対外正式公布)1999年(平成11年)8月13日(立法化)となっている²⁵⁾。

また、現在の小学校学習指導要領解説4章1.(3)に「国歌「君が代」は、いずれの学年においても歌えるように指導すること」と書かれている²⁶⁾。

それと、近年様々なところで活躍する日本を代表するスポーツ選手の背後に流れる国歌の「君が代」の演奏はやはり感動を誘う日本の音楽として定着してきていると考える。

②「蝶々」

この歌はスペイン古伝(民謡)であり、歌詞の作者は野村秋足(旧愛知師範教員)であり、伊沢修二によって補足されている。当時は唱歌として実施するために案を出しても賛成者がおらず、きかせても眠気を催したとか、経文をきくようだとかの冷評、酷評が集中したという。ところがメーソンが幼稚園の子供たちに「蝶々」をヴァイオリンで演奏したところ、子供たちは熱心に唱って、踊り上がって喜んだ。子供たちが無邪気に喜んでいるのを見て、近代音楽の将来のために大いに意を強くしたという。

歌詞は「てふてふ(蝶々)てふてふ、菜のはにとまれ、なのはにあいたら、桜にとまれ、桜の花の、栄ゆる御代に、とまれよあそべ、遊べよとまれ。」であった。その解説として「(中

略）皇代の繁栄スル有様ヲ桜花ノ爛漫タルニ擬シ、聖恩ニ浴シ太平ヲ楽ム人民ヲ蝶ノ自由ニ舞イツ止マリツ遊ベル様ニ比シテ、童幼ノ心ニモ自ラ国恩ノ深キ覺リテ之ニ報ゼントスルノ志気ヲ興起セシムルニアル也。（『唱歌略説』第二）」と書かれている²⁷⁾。

現在は無心に歌われる幼児の唱歌であり、この唱歌にも今は歌詞も変わってきているものの、このような一つ一つの歌にその時代の日本人の古い昔からの思いが込められて作曲されているのが理解できる。

②「見渡セバ」（むすんでひらいて）

この曲のメロディーは現在の「むすんでひらいて」であり、フランスの思想家で18世紀啓蒙思想の代表者の一人ジャン＝ジャック・ルソーは、音楽家でもあり、その百曲をはるかに超える音楽作品のほとんどすべては単純この上ない歌曲や重唱曲であったが、オペラにも手を染め、当時話題となった牧歌劇『村の占い師』はパリのオペラ座（当時の王立劇場）の舞台に懸けられて19世紀まで上演が続けられた異色作であった。その中に劇中劇の形で演じられる黙劇が含まれていて、その冒頭の旋律がルソーの手を離れて、シートミュージック（1枚刷りの楽譜）となった。それが英国ではわずか1音の変化で変奏主題となりそれはさらに賛美歌に始まって、恋歌、民謡、子守歌、あるいは種々の器楽曲にも変容し、アメリカでももてはやされた上で19世紀の70年代には、遙々と東洋にまで太平洋を渡って伝来したのであった。これこそ『むすんでひらいて』のメロディーの元となる曲なのだ²⁸⁾。

園部三郎の著書から引用された「幼児と音楽」による文章によると「音楽取調係によって明治14年（1881年）から明治17年（1884年）にかけて小学生のための『小学唱歌集』（全3巻）が発表された。その小学生用の教科書の第1巻に、今日では「むすんでひらいて 手をうってむすんで……」という歌詞で歌われている曲が、「みわたせば、あおやなぎ、花桜、こきまぜて、みやこには、春の錦をぞ……」という歌詞で、しかも『むすんでひらいて』と同じ曲でのせられていた。」²⁹⁾

この日本に伝来して初めて、自然讃美、自然謳歌の歌となった「見渡セバ」などの唱歌は『小学校唱歌集 初編』で春夏秋冬、あるいは春秋、春、山川草木、あるいは小鳥や虫、その他自然に関係ある主題を扱った唱歌は23点ほどで圧倒的な多さを誇っている³⁰⁾。

その「見渡セバ」が「むすんでひらいて」になったのは、明治36年以降から明治42年にいたる期間に幼稚園の〈遊戯〉の保育内容として加えられたものという。この期間に、小学唱歌『見渡セバ』はその優美でどこかな美しい原詞を捨て去り、すでに長きに亘って多様なかたちで親しまれてきたそのメロディーに誠に単純な歌詞ともいえる身体動作の動きをあらゆる言葉をつけ加えることで、幼子の歌『むすんでひらいて』に変身したにちがいない。私たちは上述の明治42年の記録から『むすんでひらいて』がすでに明治時代末期には〈遊戯歌〉として位置づけられていたという事実を知ることが出来る³¹⁾。

③春が来た

明治43年文部省発行の『尋常小学校読本唱歌』の掲載。読本唱歌は、当時の文部省発行国語読本（国語教科書）にあった定型詩に作曲した唱歌教科書（全一冊）である。曲の形式はa, a'の一部形式の曲である³²⁾。

この曲は高野辰之作曲 岡野貞一作曲で、春の情景を描いたほんのりとした温かさを感じさせる曲である。歌詞は「どこに咲く？」という問いに、山、里、野にも咲くという答えで、すべてに春の訪れを知らせる明るい歌である。小学校教員のための弾き歌い練習にはほとんど誰もが練習する曲である。

④ふるさと

高野辰之作詞 岡野貞一作曲で、「おぼろ月夜」と同じ、『尋常小学唱歌』第6学年用に「故郷」として新作掲載された。この曲は世代を超えて歌われる唱歌の代表的な名曲であり、筆者も合唱や弦楽合奏など演奏会の折には、演奏会の最後に会場の方々と一緒に、よく歌っている。

高野辰之は尋常小学校読本の編纂委員の後、明治43年の6月に文部省唱歌編纂委員に任命され、同じ委員の東京音楽学校の作曲家である岡野貞一がいた。日本人に向けてないと思われる3拍子であったが、ふるさとをイメージした岡野の美しいハーモニーに、高野がふるさとで、昔、兎狩りをしたり、鮎を釣ったりした小川のことを思い出しながら、3拍子の韻律の試みをした。その結果、言文一致運動の唱歌と趣を異にする、格調高い文学的な歌詞になった。誰もが歌える音域の曲に仕上がった。ふるとは近代的な西欧音階をベースにして日本的な韻律の風景を作り上げた和洋折衷の国際的な唱歌であるといえる³³⁾。

⑤「花」

この歌曲は「四季」と題して明治33年（1900年）発表した組曲の1曲目である。「花盛り」というタイトルであったものを、作詞者の東京音楽学校教授・武島羽衣（明治5年～昭和42年）自信が改めた。2曲目の『納涼』は同校先輩の東久米作詞、3曲目の『月』の歌詞は廉太郎の自作だが、中国の詩人蘇軾の漢詩「春夜詩」を踏まえたものであり、4曲目の『雪』は同校教授中村秋香（天保12年～明治43年）の作詞。隅田川の堰堤は江戸時代からの桜の名所で有名だが、この歌曲には隅田川を上り下りする船から見える風景に託して、春を歌いあげるほか、文明開化の御代の帝都・東京の繁栄を謳歌するという象徴的な意味合いがあったようである³⁴⁾。

平成23年の今年、9月に学会で富山へ行き、会場に行く途中、松川という船乗り場に「瀧廉太郎Ⅱ世号」という遊覧船が停泊していた。船乗り場の人に聞いてみると瀧廉太郎とゆかりがあるということであった。松川の両側が春には460本の桜が咲き乱れるような風景であり、「日本のさくら名所100選」にも選ばれている所だという。咄嗟に「花」のメロディー

が思い出され、近くには富山城もあり、「荒城の月」も関連して想像させた。

明治時代、瀧が当時は今の6倍の広さがあった旧富山城内の小学校（現在の富山税務署のあたり）に約2年間通っていたという。土地の人の話では毎年瀧廉太郎ゆかりの演奏会が開かれるということである。

⑥「荒城の月」

西洋の音階で最初の日本歌曲の代表作は「荒城の月」である。この明治34年（1901年）に出版された「中学唱歌」はいずれも単旋律で伴奏はついていなかった。土井晩翠の詩によるこの曲は原曲ではロ短調、8分音符単位の4分の4拍子で書かれていたが、後年山田耕筰が4分音符単位に書きかえ、原曲の一小節を二小節のわけ、さらに“花の宴”の〈え〉のところの半音進行シャープ記号をのぞいて平明な旋律に直した。その上、ピアノ伴奏をつけ加え、大正7年出版されたが、山田が存命中は山田耕筰改編と記されていたが現在はほとんど消えてしまった。土井晩翠は仙台の青葉城、または鶴ヶ城をイメージしたといわれ、廉太郎は多感な少年時代を送った竹田の岡城跡を想いながら作曲したと思われる。そして無念の帰路、ロンドンに寄港の折、姉崎正治（嘲風）、土井晩翠が廉太郎を訪ねた。「荒城の月」の詩人と作曲者はただ一度の出会いであった³⁵⁾。

土井晩翠は明治4年（1871年）仙台に生まれ、東京帝国大学に学び現在の東北大学の教授になった。本名は林吉といい、また「どい」ではなく「つちい」といった。「つちい」と読んではもらえなかったため、昭和24年仙台名誉市民になった時に「どい」と呼ぶことを認めた。瀧が土井のこの詩を読んで作曲意欲を燃やしたのは、瀧自身が竹田の小学校時代、近くの岡城跡でよく遊んでいて、そのころの思い出を18歳の時に「古城」という詩を書いているほどであるということから考えられる。

『瀧廉太郎の18歳の詩』

外堀は 田にすきかえされ

内堀は年毎にあせて 二百年の名残やなに

水草にいる辺に橋杭朽ちて 野菊咲くかげ 石ずえ残る

一の木戸か 二の木戸か

あなあわれ ……

この他に組歌「四季」の中の春「花」と秋「月」も廉太郎の詩である。「荒城の月」は土井晩翠の詩集に入っておらず、一説によると晩翠が他から登用して作詩したといわれ、彼自身の自信作ではなかったかもしれない。たとえば、歌いだしである「春高樓の花の宴……」は、杜甫の「登樓」の「春は高樓に近くして客心傷ましめ、万万多難、此に君臨す」に、二番の「秋陣營の霜の色……」は、上杉謙信の詠んだ「九月十三夜」の「霜は軍營に満ちて、秋色清し……」という具合に、随所他のものと類似しているところがあるからだといわれている³⁶⁾。

⑦「うみ」

作曲は井上武士。文部省唱歌『うみ』は国民学校（小学校）一年生用の国定教科書『ウタノホン（上）』（昭和16年 文部省）に、「ウミ」というタイトルで掲載された。昔の小学生はまずカタカナを習ったので、歌詞もほぼカタカナである。教科書編纂委員で作詞者の林柳波は（明治25年～昭和24年）は素直なこどもの発想に寄り添いながら、分かりやすい話し言葉で、海の豊かさや大らかさを表現することも心がけた。同じく編纂委員だった作曲者の井上武士は歌いやすくやさしい旋律の曲をつけたので、今でも教科書教材として親しまれている³⁷⁾。

前橋市内、五代町公民館に井上武士の歌碑があるという。歌碑の表には次のようなことが書かれているという。

井上武士先生顕彰の碑

私は音楽を学んだことを喜ぶということよりは、
音楽に感動する心を持ったことをうれしく思います。
どうかみなさん、よい音楽を感動するひとになってください。

井上武士

前橋市長 萩原弥惣次 謹書³⁸⁾

⑧「蛍の光」

卒業式の時などに演奏され、年末や店舗の閉店で流れる「蛍の光」は明治14年『小学校唱歌』の中に載せられ、原歌詞は『蛍』の題名で第4節までであったが、現在は第1節と2節が歌われ、文部省唱歌「蝶々」の稲垣千穎の作詞であるということが有力視されている。原曲はスコットランド民謡でスコットランドに古くから伝わる旋律に、詩人のロバート・バーンズ（1759年～1796年）が歌詞をつけたAuld Lang Syne『過ぎ去りし遠き昔』であり、アメリカ経由で入った旋律が、賛美歌になった。スコットランド民謡が日本民謡と同じ「ファ」と「シ」の音を使わない『ヨナ抜き』音階であったことから日本人には歌いやすかったことと、「蛍雪の功」の故事を歌い込んだことも、お別れの唄として定着した理由かもしれない³⁹⁾。

⑩「あおげば尊とし」

この歌は「小学唱歌集（三）」（明治17年文部省音楽取調掛）に掲載され作詞、作曲は不詳である。当初は「師の恩」や「告別歌」というタイトルにしようという案が出されたが、「あおげば尊とし」になった。「わかれめ」は〈別れむ〉の係り結びで〈別れよう〉の意、「いと疾し」は〈たいへん早い〉の意、「むつみし」は〈親しく交わった〉の意、「やよ」は感動詞で〈さあ〉の意。三番には〈蛍雪の功〉の故事が歌い込まれ、これは「夏は来ぬ」「蛍の光」

にも見られるので日本人に好まれて、卒業の歌として定着したといえる⁴⁰⁾。

5. 芸術としての日本歌曲と作曲家

日本洋楽百年史の演奏会記録から見ても、瀧廉太郎の出演した演奏会には廉太郎自信が作曲した日本の合唱が披露されているが、その後のほとんどが外国曲であるのが確認できる。このように外国曲を高尚な音楽として推奨する半面、戦争中には様々な制限され、外国曲を歌うことも日本語に全部訳さなければならなかったことなどを考えると、今の日本が自由で平和な音楽環境であるかがわかる。

後述の日本歌曲の歴史概略はわが恩師四家文子氏の「日本歌曲のすべて」の中の〈日本歌曲の歴史〉と「日本歌曲について」(畑中良輔著)によるものであるが、芸術としての日本歌曲も現在は発展し、数々の名曲が生まれている。勿論、一般には解釈の難しい歌も多々あり、西洋音楽と同等の力を得たといえる。

日本歌曲の礎となる歌が作られ、さまざまな検討が繰り返されて、確立されてきた。

前述したように、明治12年(1879年)に、東京音楽学校の前身である文部省音楽取調係が設置された。その頃は雅楽調の唱歌が作られ、それが「国歌君が代」越天楽などである。その後、軍歌や小学校唱歌や外国曲に日本語を当てはめて歌う曲が作られ、芸術的な日本歌曲というほどのものではなかった。明治31年(1898年)瀧廉太郎が音楽学校卒業後、「荒城の月」「花」などの後世に残る作曲をし、芸術としての日本歌曲の道を開いた。10年後には山田耕筰が数々の名曲を残した。信時潔を含む前述の3人はドイツ風の作品である。

明治末から大正にかけ、すぐれた詩人であった北原白秋、西条八十、野口雨情、鈴木三重吉など作曲家たちと手を組んで童謡を作ろうとする運動が起きる。小松耕輔、本居長世、弘田龍太郎、藤井清水、梁田貞、杉山長谷夫、草川信などが意欲的な作曲をして、今日もなお愛唱されている歌がある。ここまでは創成期で、昭和に入ると歌曲の創作も変化してきたが、昭和初年から戦争中の作曲界は器楽の作曲活動が活発であった。戦時中には軍の方針と結びついた民族意識昂揚のために、外国音楽は演奏を制限され、外国の名歌も邦訳詩で歌わなければならなかったため、日本音楽が奨励されることになった。

そのような中でも箕作秋吉、清瀬保二、そして橋本国彦、平尾貴四男、深井史郎、服部正、平井康三郎などがそれぞれの個性ある歌曲を書き、また山田夏精(和男)、高田三郎、高田信一、宅孝二などの仕事がよい実を結んでいる。

日本の本格的な楽壇の充実と発展は終戦後、混沌状態の中からたくましく、湧き起こってきた。戦時中の強制的、偏見的、民族意識昂揚のためでなく、敗戦国民としての日本人が世界的に誇り得る、本物の日本音楽を創造するためには、民族の基盤に立つべきであるということを感じたことから始まった。

中堅作曲家として中田喜直、別宮貞雄、小倉朗、石桁真礼生、小山清茂、柴田南雄、団伊

玖磨、清水脩、伊福部昭、菅野浩和、間宮芳生などだが、特に中田喜直はピアノ科出身であるが、戦後まもなく発表した「六つの子どもの歌」はいずれも芸術的な香り高い作品として発表し、日本歌曲を世界の名歌に匹敵すると考えられる。團伊玖磨、別宮貞雄、柴田南雄は美しい抒情的な流れを特徴とする逸品があった。小山清茂は民謡風な味、間宮芳生は民謡の新鮮な再現、菅野浩和は民話を語り風に歌うという新しいジャンルでそれぞれ開拓した。

日本の楽壇を世界的水準にもっていくには優れた日本の作品を生み出してそれを立派に演奏しなければならぬという自覚が強まってきた。特にことばと密着した声楽曲の場合は、なおさらその感度が高いわけで、日常我々が想いを述べ、心を託している日本語をそのまま音楽的に歌いあげた歌曲が、どんなに我々の心にしみじみと通ってくるものかという事実を幾つかの優れた作品によって、つくづく知ることが出来た。昭和の初めは洋楽偏重で『音楽学校をせっかくでたのに日本語の歌を歌わなくても良からうに』といわれたくらいで日本歌曲を歌うことにはかなりの勇気が必要だった。日本歌曲だけの独唱会を開くことなどは、大変な冒険で、実行する人は非常に少なかった⁴¹⁾。

大中恩は抒情と意味を音の中の的確に描き出し得ていて、その歌曲を聴くものにとっても、あたたかいやすらぎと郷愁を呼びおこしてくれる作曲家である。小林秀雄も、抒情歌曲の分野で多くの名作を生んでいるが、合唱曲にもすぐれた作品があり、「落葉松」は合唱曲に、独唱曲にいまや国民愛唱歌的存在となっている。いつまでも忘れ難い情感を残す「車塵集」の芥川也寸志、「子供の国」の世界から、十二音音列歌曲への変貌の鮮やかさが強烈な印象を与える諸井誠。生きることの愉悅をもって、音そのものをいつくしみながら、ひとの心をいつくしんで、これまで耳にしなかったような音の世界をひらいてみせてくれる⁴²⁾。

このほか、まだここに書ききれない数の作曲家や演奏家が存在し、芸術としての日本歌曲の世界も発展を続け、多くの日本歌曲が生まれ歴史を作り続けている。

6. おわりに

時代による流行語はめまぐるしく生まれては変化していき、美しい日本語の行方に不安を感じるときもたびたびある。どの時代にもそのような不安はあり、昭和41年(1966年)に恩師である四家文子氏(明治39年生(1906年)~昭和56年没(1981年))は『美しい日本語と香り高い歌を』という精神をモットーとして提唱されて、「波の会」を創始された。その当時、会長は四家文子氏で、副会長は金田一春彦氏、薩摩忠氏であった。四家氏は日本を代表するアルト歌手であり、歌を深く愛し、日本歌曲に対する情熱は日本一であった。四家氏の執筆された「歌ひとすじの半世紀」の年表には昭和44年11月紫綬褒章受章(優秀な門下生の功績による)、また昭和51年勳四等宝冠章受章と記されている。恩師の大学でのレッス

ンは厳しいことも有名であったが、日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、オペラなど基礎からしっかり身につけていただいたことは、足元に及ばなかったにしても、今に繋がっていると感謝している。

昭和56年四家氏が亡くなられ、その後、会長は故磯部俣氏に受け継がれ「新・波の会」となり、小林秀雄氏をはじめ、著名な方々が、会長となりその遺志が受け継がれ、今は「日本歌曲振興会」となっている。2011年はちょうど恩師が亡くなってから30年目である。

日本に洋楽が入ったその歴史は西洋音楽の2000年ほどの研究歴に比べれば、まだ浅いということになるが、わらべうた、日本古謡、民謡など日本の歌は西洋音楽の楽譜を学んだことによって受け継がれ、活かされ、伝承されてきた。そして明治時代の音楽家の弛み無い努力によって、現在の日本の愛唱歌が存在し、幼い時から今までに学校などで学んだ歌は、生涯その人の心に深く住み続けていることは事実である。したがって、日本の音楽教育の発展に貢献した人々を理解し、日本歌曲の背景も認識することで、情緒豊かな日本の心を感じ、美しく伝承していける教育現場になることを願いたい。

また、以前「東洋人に西洋音楽は可能か？」ということをも、ドキュメンタリーで、有名な指揮者：小沢征爾氏とチェロ奏者：ヨーヨーマ氏の議論をしていた映像を観たことがある。筆者もその言葉を聞いた時は、何か大きな課題を与えられたような気が長い間残っていた。その後、両氏の長年のさまざまな資料から「東洋人に西洋音楽は可能である」という結論に至ったと解釈している。

今回、この歌曲の歴史資料を視て、日本人が洋楽を学んだことによって、日本人独自の音楽を表現できる一つの知恵と方法を授かったのだという考えに達した。西洋の音楽理論は緻密なものであり、モーツァルトの音楽のように簡単なものと感じる楽譜であるものでも、理論的には完璧に作曲されている。洋楽を学ぶことでさらに音楽表現の世界が広がり、日本の古来のさまざまな心が生き続けて伝えられたともいえる。特に歌曲はメロディーだけでなく、歌詞、伴奏が一体となってより率直に表現できる力を持ち、その歌曲の背景を知ることによって、さらに表現するイメージが広がる。こうした学び方を広め、日本の歌がさらに愛されることを願い、歌曲の背景を研究しながら、『美しい日本語と香り高い歌』をこれからも指導していきたい。

注

- 1) 東京新聞出版局編「上野奏楽堂物語」東京新聞出版局 1987年10月5日初版 p14 (海老沢有道著『洋楽伝来史』p94-105)
- 2) 畑中良輔著「日本歌曲全集解説書 日本歌曲について」音楽の友社 1991年6月30日 p20
- 3) 前掲1 p14, 15
- 4) 前掲2 p20

- 5) 秋山龍英編著 井上武士監修「日本の洋楽百年史」第一法規出版株式会社 1966年1月10日 p7
- 6) 前掲5 p7-8
- 7) 前掲1 p16
- 8) 前掲1 p18
- 9) 上沼八郎著「伊沢修二」吉川弘文館 1988年8月1日新装版第一刷 p331
- 10) 前掲9 p95-103
- 11) 前掲9 p333-334
- 12) 前掲9 p337-343
- 13) <http://ja.wikipedia.org/wiki/高野辰之>
- 14) <http://ja.wikipedia.org/wiki/岡野貞一>
- 15) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」2008年8月 p88~91, p70
- 16) 藤原薫著「愛の歌 音楽のしるべ」創教出版 1994年5月20日 p114~115
- 17) 前掲2 P30
- 18) 海老沢敏著「瀧廉太郎—夭折の輝き—」岩波新書 2004年11月19日 p196~198
- 19) 前掲18 p3
- 20) 星野辰之「歌碑を訪ねて 日本のうた 唱歌ものがたり」新風舎 2004年1月18日 p160
- 21) 前掲1 p58
- 22) 前掲9 p102
- 23) 内藤孝敏「三つの君が代」中央公論社 1997年 1月25日初版 p7
- 24) 前掲23 p22~23
- 25) <http://ja.wikipedia.org/wiki/君が代>
- 26) 前掲15 p68
- 27) 前掲9 p103~104
- 28) 前掲18 p65
- 29) 海老沢敏著「むすんでひらいて考」岩波新書 1986年 p8
- 30) 前掲18 p76~77
- 31) 前掲29 p282~283
- 32) 初等科音楽教育研究会編 初等科音楽教育法 小学校教員養成課程用2009年4月30日 p15
- 33) 前掲20 p34~35, 39
- 34) 文化庁編 親子で歌いごう日本の歌百選 東京書籍 平成2007年7月19日 p180
- 35) 前掲2 p30
- 36) 前掲16 p116~117
- 37) 前掲34 p38
- 38) 前掲20 p159
- 39) 前掲34 p188
- 40) 前掲34 p54
- 41) 四家文子著 日本歌曲のすべて 創彩社 1962年1月20日 p13~16
- 42) 前掲2 p25